

## 辛味に対する嗜好傾向と味の閾値 (第3報)

鈴峯女短大 ○岡本洋子 倉敷市立短大 田口田鶴子 岡山県立大保健福祉 須見洋行

倉敷市立短大 小野謙二

【目的】本報告では辛味を取り上げ、辛味を特徴とする食べ物（以下辛味食品とする）ならびに香辛料のイメージ・嗜好傾向について検討した。さらに香辛料・薬味の保有状況、調理への関心度、日頃の食事状況についても検討して、それらの相互関係を明らかにした。また辛味関連物質の味の閾値検査を行い、その感受性を調べた。

【方法】年齢18～20歳の大学生女子を対象として、「辛味食品・香辛料についてイメージと嗜好度」「香辛料・薬味の保有状況」「調理への関心度」「日頃の食事状況」を調査した。またカプサイシン、サイクロデキストラン( $\alpha, \beta, \gamma$ )添加のカプサイシンの等差濃度水溶液を検査試薬として、上昇系列的に、感受下限閾値を検査した。

【結果】(1)辛味食品、香辛料、日常食品のイメージ得点を変数として、数量化3類による解析結果、辛味食品、香辛料、日常食品それぞれによって、イメージが異なることが2次元空間上に認められた(上位2個の固有値 0.424, 0.202)。

(2)辛味食品の嗜好度が大きい被検者は、料理関連記事の保存や各種スパイスの使用等調理への関心度が有意に高い傾向を示した(Duncan's Multiple Range Test  $P < 0.01$ )。

(3)辛味食品の嗜好度が大きい被検者は、香辛料・薬味の保有率が高い傾向であった。

(4)カプサイシン溶液、 $\alpha$ 型サイクロデキストラン添加のカプサイシン溶液、 $\beta$ 型添加の溶液、 $\gamma$ 型添加の溶液では、 $1.0 \times 10^{-10} \sim 1.0 \times 10^{-6}\%$ 、 $1.0 \times 10^{-9} \sim 1.0 \times 10^{-6}\%$ 、 $1.0 \times 10^{-11} \sim 1.0 \times 10^{-7}\%$ 、 $1.0 \times 10^{-10} \sim 1.0 \times 10^{-5}\%$ の濃度範囲で大部分の者が感受した。 $\beta$ 型サイクロデキストラン添加の場合に、カプサイシンの閾値が最も小さかった。